外国語部会会報

第27号—1989

徳島県中学校教育研究会外国語部会

目　　次

The Berlin Wall Comes Down
on Nov. 9, 1989

巻　頭　言……戎　忠保

Internationalization and English Education ……小泉　博稔…… 1

Jekyll-Sensei and Mr. AET …… Stephen C. Bridge …… 3

The Beauty of Youth …… Kurt S. Kameda …… 6

CROSS-CULTURAL SHOCK-WAVES …… Madhu K. Kans …… 8

THAT'S TOO DIFFICULT FOR MY STUDENT …… Jenny Davis …… 10

The Need For A Communicative Environment … Elisa A. Takao …… 13

A Few Comments From Matsushige Junior High School
…… Gregory S. Gallagher …… 15

研究大会報告

平成元年度徳島県中学校英語教育研究大会

1　要　　項…… 17

2　指　導　案……河野　誠敬…… 18

3　分科会報告

第1分科会　研究授業について……藤川佳都子…… 21

第2分科会　中・高の連携について ……安部美恵子・尾上　幹也…… 23

第3分科会　学習指導要領について ……樫葉みつ子・増井今日子…… 27

4　講演要旨……和田　稔…… 31

第28回四国英語教育研究会 …… 那住　公子…… 32

第39回全国英語教育研究大会参加報告 ……河野　誠敬・那住　公子…… 36

教育課程研究

平成元年度中国・四国地区中学校教育課程講習会

新学習指導要領（外国語）の趣旨と要点

矢部　久・畑田　進一・向川　守…… 41

研究と実践

第3回中高英語研究大会報告 ……藤本　四郎…… 49

徳島県中学校英語教育史資料（その8） ……佐光　昭二…… 50

海外研修報告

イギリス・西ドイツ・アメリカに見る最近の教育動向……逸谷　健治…… 55
A REPORT ON THE STUDY IN THE UNITED STATES FOR JAPANESE TEACHERS OF ENGLISH, 1989
UNIVERSITY OF CALIFORNIA IRVINE……源　憲一…… 59
University of Minesota……浜　純子…… 64

どうぞよろしく

生きた英語を……上柿　直美…… 71
吉野中学校に赴任して……長谷　郁代…… 71
今までをふりかえって……南　有子…… 72
学力形成と授業……佐藤　美智…… 72
「どうぞよろしく」……吉本　紹代…… 73
伊座利分校に赴任して……阿部志津代…… 73
“新任一年目”……都郷　雅司…… 74
まず自分の英語力を伸ばそう……榎村　光世…… 74
新入生と共に……中川貴美子…… 75
新任教員になって……宮本　健一…… 75
笑　顔……上田　照美…… 76
上勝町高鉾中学校に赴任して……宮本　和香…… 76

教育研修センター便り

A Report From Tokushima In-service Teachers' Training Institute……田中　宏…… 77

生徒の活動

高松宮杯第41回全日本中学校英語弁論大会に参加して……近藤　皇行…… 79
第26回スペリングコンテストに優勝して……片岡　昌美…… 80
第43回徳島県中学校英語弁論大会
郡市予選・県大会入賞者，全国大会入賞原稿，歴代優勝者……坂田　淳治…… 81
第26回徳島県中学校英語スペリングコンテスト
郡市予選・県大会入賞者，問題，考察……向川　守…… 85

平成元年度郡市事業報告…… 88
平成元年度役員…… 89
編集後記…… 91

徳島県中学校英語教育史資料（その８）

― 英学人列伝　海部忠藏 ―

徳島文理中学校教諭　佐　光　昭　二

開　塾　廣　告

拙者儀今般左ノ處ニ於テ私塾ヲ開キ海部塾ト唱ヘ左ノ學科ヲ教授セントス有志ノ人ハ弊塾規則書一覧ノ上入學アル可シ

豫科

普通英學

字音書・第一二讀本・文典・地理書・萬國史・理學・米國史・英國史・佛國史・羅馬史・希臘史・修身學・動物學・植物學・ウェーランド氏經濟書・法律學・化學・人身究理書・近世史・ギゾー氏文明史・論理學・ミル氏經濟書・心理學

本科

農業學

農學初步・耕圃學・稼穡學・果實學・家禽學・農業器械學・植生如何・肥糞論・植養如何・牧牛學・牧羊學・牧馬學・農用化學・農業經濟學・獸醫學・山林學・昆虫學

高知縣阿波國名東郡北山路町四十四番地

海　部　忠　藏

明治十三年二月廿五日

（筆者注　＜英語テキストについて＞　字音書 ― ウエブストル氏字音書 Noah Webster：The Elementary Spelling-Book，第一二讀本 ― ウイルソン氏第一讀本・第二讀本 Mercius Willson：School and Family Primer Ⅰ，Ⅱ，文典 ― ピネウ氏文典 T. S. Pinneo：Primary Grammar of English Language　＜英語以外のテキストについて＞　明治初期は翻刻邦刊本も出はじめていたが，テキストは大体原書に拠ることが本流であった。（原書テキスト名　略）　＜開塾の場所について＞　名東郡北山路町とは，現在の徳島市東山手町あたりになる。）

これは明治13年（1880）3月2日付の「普通新聞」（徳島の日刊紙）掲載の広告記事であるが，予科で英学を，本科で農業学というところが異色である。こうした英学による実業教育は，地方では

たいへん珍しいことであって，当時東京の英学私塾では，商法講習所（現一橋大学の前身）や学農社農学校などがあったが，官私ともに商業教育とか農業教育というのは低調であった。後者の学農社は津田仙による明治９年（１８７６）開校の農学校であるが，広告の海部忠蔵を語るには，先ずこの津田仙と学農社について述べておかなければならない。「明治八年開学願書」（東京都公文書館蔵）には次のようにしるされている。

「私学開業願　学農社　東京府下第二大区十二小区麻布東町二十三番地　東京府士族津田仙明治八年七月　三十七年九ケ月　幼年ノ時旧佐倉藩小倉彌学ニ就テ漢学ヲ修メ其後二拾歳ニ至リテ手塚律蔵ニ随テ蘭学ヲ学ビ又森山多吉郎ニ随テ英語学ヲ学ビ旧幕府外国方相勤メ慶応二年米国江航シ明治三年東伏見宮英学修業中侍読相勤メ明治六年博覧会御用ニ付澳国江被遣彼地ニ於テホーイブリンク氏ニ従テ農学ヲ学ブ」。これを補足すれば，津田仙が生まれたのが天保８年（１８３７）１０月，佐倉（千葉県）藩士小島良親の子で幕臣津田栄七の養嗣子，津田梅子は次女。彼はオーストリアから帰国後キリスト教徒となり，明治９年（１８７６），農業の近代化と人材の育成のため学農社農学校を創立，西洋の野菜・果樹の栽培普及にも努めた。教科目は「稼穡学，耕圃学，牧畜学，植物学，動植性理学，地質学，化学，翻訳書，本邦農書，実験」その余科の科目として「スペルリング，リードル，文法書，理学初歩，万国史，窮理学，経済学，算術」を掲げている。彼は明治４１年（１９０８）に歿，享年71歳であった。

学農社は時代を先駆した。この学農社を支えた教師陣のひとりに徳島出身の海部忠蔵がいたのである。これは津田仙の懇望によるもので，前記海部塾と学農社の教科目を見比べ，海部忠蔵が徳島での開塾以前に津田仙との深いかかわりを思うのである。学農社には，スタッフとして他に同志社英学校から中島力造，元良勇次郎，岡田松生らが迎えられ，外人教師にホイットニー（W. C. Whitney）らがおり，英学を基盤にしていることがわかる。津田仙は，教育方針として彼のキリスト教的理想をいかし，農業によって資実有徳の人物を養成しようとその精神教育にも重きをおいたようである。このことは，海部忠蔵の人生観に大いに影響を与えるところであった。

さて冒頭に挙げた海部塾については，この広告記事を知るのみにて，残念ながら今日その全容は分からない。塾長海部忠蔵とは，――分明の範囲で述べてみたいと思う。

海部英一郎氏（海部忠蔵三男忠義の長男）は，私家版「祖父『海部忠蔵』のこと」の中で次のように述べている。「先祖は海部藩の主であったと言われ，戦国の頃，長曽我部元親に攻め滅され，蜂須賀侯に頼って家来となった。四国のこうした土着の武士は，その後徳川幕府によって封ぜられた藩主，いわば占領軍の家来の「上士」に対し「郷士」と言って一段下にみられていた。……」これを「海部町史」（昭４６　海部町教育委員会編）と照合してみれば，海部城は鞆浦山下にあり，永禄年間（１５５８）に海部友光（通称三郎，代々左近将監と称した）によって築かれ，海部郡下の主城であったが，天正３年（１５７５），土佐より来襲の長曽我部元親の軍に攻略され，友光は紀州へ，友光の子海部吉清は初め三好氏に従い，後に蜂須賀侯に仕えたということである。以下海部忠蔵の生涯を年表にまとめてみる。

安政４年（１８５７）

１月１日，阿波国海部郡に生まれる。父の名は不詳，母「もよ」といった。

慶応元年（１８６５）

忠蔵九歳のとき，父を失う。漢学を学ぶ。

明治４年（１８７１）

上京，日曜学校で米国宣教師ブラウン（Samuel R. Brown 1810－1880）から英語を学ぶ。

明治11年（１８７８）

徳島で「しな」と結婚する。

明治13年（１８８０）

２月，名東郡北山路町44番地にて海部塾を開く。長男忠雄誕生。

８月，徳島尋常中学校（現城南高等学校の前身）の英語教師に就任する。

明治14年（１８８１）

３月，徳島尋常中学校を退職する。

当時県内で英学私塾といえば，明治８年から９年にかけて慶応義塾の徳島分校があったが，経営不振で廃校。つづく海部塾も思いきった発想のもとに開業となったが，これも生徒が集まらなかったか，修学にたえ得る生徒でなかったか，彼はやがて公立学校へ転身する。徳島尋常中学校は明治８年創設の名東県師範学校附属変則中学校の後身であり，明治11年12月に開校。彼が就任当時英語教師としては，髙畠保三郎（1855－1926 藩医髙畠耕斎の三男 外国語学伝習所・徳島師範学校の英語教師を歴任）と渡辺真一郎（慶応義塾徳島分校出身）がいた。そして彼が同校退職前に井上省三（1860－1891 辞書で有名な英学者十吉の兄）が加わっている。

４月，知友津田仙の懇望により妻を伴い上京，学農社農学校（明治９年創設・校主津田仙・東京麻布本村町）の英語教師となる。彼の授業は，講堂で英語の農学書を口訳することであった。同校は経営不振のため明治17年に廃校となり，学生は駒場農学校（東大農学部の前身）へ編入した。

明治15年（１８８２）

母もよと長男忠雄上京する。

明治17年（１８８４）

津田仙の推挙により内務省勧農局に奉職する。後，病気のため一時帰郷。

明治19年（１８８６）

上京して大蔵省印刷局に奉職する。

明治20年（１８８７）

12月，普連土女学校（現港区三田四丁目）の初代校長に就任する。

米国宣教師コサンド夫妻（カンザス州出身）がフィラデルフィアのフレンド派伝道委員会によって，明治18年，伝道と女学校設立を目的に派遣されていたのであるが，津田仙の紹介により同宣教師を知る。日曜聖書講義会に出席，やがてコサンドの英語講義の通訳を担当

することになる。コサンドの聖書講義会は日本基督友会聖坂友会に発展，コサンドの妻サラ・アン・コサンドは少女を集めて編物・洋裁・英語等を教授し，これが普連土女学校として明治20年10月3日，芝区三田功運町に開校された。

同校は特に英語教育に力点がおかれ，外務省記録「外国人雇入明細鑑第5巻」及び「外国人私雇入雑件第3巻」（外交史料館蔵）によれば，海部忠蔵校長が在任中に雇入れた外人教師は次の通りであった。

原籍	被傭人姓名	年齢	職務	給料	雇入期限
米国	Sara Ann Cosand (the wife of Joseph Cosand)	52 (明治32)	英語・裁縫・編物教師	特志無給	自明治21年 2月1日 至明治33年 1月迄
英国	Miss Mary Anne Gondry		英語教師	無給	自明治22年10月 至明治25年10月
米国	Miss M. Haines	32	英語教師	無給	自明治25年11月 至明治28年11月
米国	Anna C. Hartshorne	33	英語教師	無給	自明治26年10月 至明治27年10月
米国	Minuie M. Pickett	25	英語教師	無給	自明治26年10月 至明治27年10月
米国	Gurney Binford	29	英語教師	無給	自明治27年 1月 至明治30年 1月

（注　Sara Ann Cosand は初め築地外国人居留地内，後明治32年6月より普連土女学校校舎内を住所とした。他の外人教師もすべて同校校舎内であった。）

明治21年（1888）

次男次郎生まれる。

明治23年（1890）

夏，アメリカのアールハム・カレッジ（Earham College－Richmond, Indiana Province）に留学，土木学を専攻する。

明治26年（1893）

夏，同校を卒業，Bachelor of Science の称号が与えられる。帰国後，麻布区新堀町4番地の自宅で日曜学校を開く。また帝国育英館（孤児院）を設立する。

明治30年（1897）

三男忠義生まれる。

明治45年（1912）

3月，普連土女学校を退職する。以後キリスト教伝道の生活を送る。

昭和17年（1942）

9月9日，渋谷区代々木富ケ谷1488にて老衰のため死去，青山墓地に葬られる。享年85歳であった。

晩年の海部忠蔵
（海部英一郎氏提供）

海部忠蔵の人物評については，一口にいってワンマンな事業家タイプで，かなり押しの強い一面もあったようであるが，信念と実行力とアイディアに富む好々爺として家族たちから深く親しまれ，尊敬を集めていた。教育者としての海部忠蔵は，女子生徒に対し厳格なしつけで臨み，学校経営には，すぐれたセンスで今日の普連土学園の基盤を確立したといわれる。また敬虔なクリスチャンとして日暮里伝道教会の仕事や日比谷などでの辻伝道など宣教と求道の日々であった。晩年は外へ出て伝道活動をすることはなくなったが，「天喜人和」の言葉を好み，額やリーフレットにして訪れる人達へくばるなど「人の和」を説いた。

海部忠蔵の生涯には津田仙との出合いが決定的といえよう。津田仙とのかかわりが何に始まったか不明であるが，彼の回想録「普連土女学校の起源と発展に就て」のなかで，「津田仙氏は私の永年の知人でありまして……」とあるように，津田仙氏が明治６年（１８７３）オーストリアで農学を学んで帰国後，同１１年（１８７８）忠蔵結婚の頃までの間に，海部忠蔵は親しく津田仙に教えを受けたものと思われる。

なお本稿でポイントであるべき彼の英学修業については，津田仙との接触前に（明治４年の頃か）上京して本格的な英学修業があったものと推測される。今後の調査研究に俟ちたい。

最後になりましたが，資料収集に御協力いただいた藤沢市の海部英一郎氏，普連土学園，外交史料館，東京都公文書館に心より感謝申しあげます。

参考図書
「普連土女学校五十年史」（昭１２　普連土学園）
「東京の英学」（昭３４　都政史料館）
「祖父『海部忠蔵』のこと」（昭４３　海部英一郎）
「海部町史」（昭４６　海部町教育委員会）
「友を頂く（日本クエーカー教徒の研究）」（昭５５　友を頂く発行所）

編　集　後　記

20世紀もあと10年を残すだけとなりました。この1989年もまた激動の年でした。年の初め，昭和天皇が崩御され時代は平成へと変わりました。経済面では，4月に消費税が導入されましたが今なお見直し等の論議がされ，税制改革は模索の段階と言えましょう。政治面では，7月の参院選で社会党の躍進により，与野党の勢力が逆転し新時代への変革の鼓動を感じます。また海外では，天安門事件が起こり，ベルリンの壁が崩壊されるなど東欧全体に民主化の波が広がり，国際社会は平和に，自由で活力とゆとりに満ちた社会へと様変わりしつつあります。

今や国際的地位が向上した日本は，このような国際情勢において，重く大きな責任を持っていると言えましょう。これからの日本人は広く深く海外の事情に通じるとともに，日本の文化や日本人の心を十分に理解し，外国の人々から尊敬され，国際的に役に立つ人として成長していかなければなりません。その手段として「英語」の果たす役割は大きいものがあります。

教育の面でも，このような時代の流れに沿った新指導要領が既に告示されています。そして平成5年度の全面実施に向けてその趣旨説明会が，昨年度に引き続いて県内でも各地で行われました。また今年度はＡＥＴが県内に18名配置され，中教研統一大会での神山中学校の河野誠敬先生の研究授業をはじめとして，JTEとのTeam-Teachingがより効果的，かつ積極的に進められているようです。近いうちに高校入試にHearing Testが導入されることも報じられ，来年度からは教科書も変わります。まさに英語教育は大きな変革期を迎えようとしていると言えます。英語の基礎教育に携わる私たちは，日々研鑽に努め，このうねりをがっちりと受けとめなければなりません。

最後になりましたが，本会報の編集に当たりまして，お忙しいなかを快く原稿をお寄せくださいましたＡＥＴの方，諸先生方に厚くお礼を申し上げます。また佐光昭二先生には引き続きご寄稿いただきましてありがとうございました。　（古川　啓）

徳島県中学校教育研究会外国語部会「外国語部会会報」

第27号　1989

印刷・発行　平成2年2月1日

発行所　徳島県中学校教育研究会外国語部会

会報事務局　徳島市徳島中学校

印刷所　グランド印刷株式会社